教えて！市立病院

〈第 88 回〉

多関節腹腔鏡鉗子を使った手術

■問合せ／市立病院総務課企画財務担当☎ 22-2450

〈今月のドクター〉

外科部長兼内視鏡外科長
佐藤佳宏 医師

皆さんは、ロボット支援手術という言葉を聞いたことがあるでしょうか。この手術は米国を中心に世界中で導入され、特に泌尿器科、婦人科を中心に急速に普及し、欧米では一般・消化器外科で増加しています。

イタリア、ルネサンス期の芸術家・発明家を想起させる名前のシステムが有名ですが、ロボット支援手術は内視鏡下手術であるため、開腹手術に比べて患者の負担が少なく、高画質３次元画像を利用できるのが特徴です。また、人間の手指や手首の動きを模倣する鉗子や、実際の手の動きよりも最大５分の１まで縮小して動かすことができる縮尺機能により、直感的で繊細かつ複雑な操作が可能になるといった利点があります。一方で、触覚が得られないことや、手術機器導入費や維持費、使用するメスや鉗子などが高額であるなどの課題もあります。

昨今、ロボット支援手術に近い手術の質を目指した「多関節腹腔鏡鉗子」が日本の薬事承認を受けました。この鉗子の利点として、先端が人間の手首の可動域より広い 360°回転し、深いところにスムーズに入ることや、ロボット支援手術では得られない触覚を得られること、通常の腹腔鏡手術の鉗子として既存の手術システムに導入できることが挙げられます。

当院では、この多関節腹腔鏡鉗子を導入し、令和２年２月から８月の間に、胃・小腸・大腸腫瘍に関する計３例の手術を行っています。腹腔鏡下手術症例全般に使用できますので、今後は胃や直腸などの難度の高い腹腔鏡手術に応用していきたいと考えています。

目指せ！健康長寿日本一 ★★★

〈第 30 回〉 目指せ健康長寿！

新型コロナ、過度に恐れず理性的な判断を

■問合せ／健康課健康企画担当☎ 24-8181

今回は石橋正道先生にお話しを伺いました。

石橋医院
石橋正道 医師

必要な時はきちんと受診を

本市での新型コロナウイルス感染例の第１報（3 月 31 日㈫）以来、医療機関への受診抑制が目立ちます。新型コロナウイルス感染を恐れてのことと思いますが、そのために服薬し続けなければならない薬が足りなくなって、持病の高血圧症や糖尿病が悪化する患者さんが散見されます。

こうした持病の悪化は、将来的に脳や心臓の重大な疾患の発症につながります。医療機関では、新型コロナウイルス感染が疑われる患者さんは院外で診察する、といった取り組みを行っており、院内感染が起きる危険性は極めて小さくなっています。過剰な受診抑制をしないようにお願いします。

偏見や差別をしないでください

新型コロナウイルス感染者への差別が問題となっています。報道でご存じの通り、私も新型コロナウイルス感染者です。私が差別を受けることはなかったのですが、退院後に転居せざるを得なくなったという事例もあるようです。

新型コロナウイルスは誰が感染してもおかしくない疾患。感染者は言わば被害者です。感染者が他人に感染させるリスクがあるのは発症から 10 日後までと言われており、それを過ぎれば、むしろ、新型コロナウイルスに感染するリスクが極めて小さい人といえます。

市民の皆さまには、新型コロナウイルス感染症を過度に恐れず、必要時は受診し、理性的な判断の下に、理不尽な差別、偏見のないようにお願いしたいと思います。